

# やぎいません おいじいよ

清宮 聡子

年中児の担任としての生活は予想以上の早さで毎日が過ぎて行った。カレンダーの日付をよく見ると、もう十二月がすぐそこまで来ていた。

## 落ち葉掃き

十一月も終わろうとしている休日明けの朝は普段よりも少し、外の掃除をするのが大変である。この時季、園庭の葉は紅葉を終えて散り始める。毎朝全ての落ち葉を掃き清めてしまうわけでは無いが、園庭へ出

る出入り口付近は、靴を履き替える場でもあり、きれいに掃いておくのが朝の準備のひとつである。

この日は休日明けということもあり、外には大量の落ち葉があった。その量に圧倒されつつも、お隣の年中児担任のA先生と一緒にいつもの手順で準備を進めた。落ち葉を集め始めてしばらくすると、A先生が「子どもたちと一緒に葉っぱを集めることにしない？」と提案された。その提案を受けて私はすぐに先日、数人の子どもたちが、藤棚の下の落ち葉を懸命に

かき集めていた光景を思い出した。目の前にある落ち葉を少し寄せるだけにして、私は保育室に戻った。

### たきび

「おはようございます」いつも朝一番に登園してくるE夫の声が保育室に響いた。私も挨拶を返し、E夫の仕度の様子を見守った。その後で「おはようございます」とひととき大きな声が聞こえた。R夫である。小柄な体から発するその声は、自分の存在を目一杯主張している。R夫の姿を微笑ましく思いながら「おはようございます」と応えた。

次々に登園してくる子どもたちに対応しながらもE夫とR夫が園庭へ向かおうとしているのが目に入った。二人の様子が気になり、後を追った。出入り口のところまで来ると外履きに履き替えようとする二人の姿が見えた。E夫がふと靴を履き替える手を止めた。先程寄せておいた落ち葉に気がついたようである。不

思議そうに見ていたが、後ろに居た私に気がついた。E夫は笑顔で「先生、これどうしたの、たきびするの？」と聞いてきた。E夫の言葉を聞いて、すかさずR夫が「えっ、たきび？ するの？」とE夫に尋ねた。

後になってよく考えてみれば、数日前にお山で、たきびごっこ”をしていたE夫やR夫にとって、落ち葉の山をたきびに結びつけることは自然なことである。しかし、一緒に掃除をしようと考えていた私にとって二人の反応は予想外のことであった。その為、一瞬どう答えようか迷ったが、落ち葉の山を嬉しそうに見ているE夫とR夫の姿を目にし、「そうね、たきび”をするのもいいわね」と答えた。それを受けて、二人はテラスに置いてある小さ



な箒を持って来た。そして周囲の落ち葉をまとめ始めた。

### “たきび”に加わるT夫とY夫

後から登園して来たT夫とY夫は、かいがいしく箒で落ち葉を集めるE夫とR夫に気がついた。T夫が「何してるの」と二人に声をかけた。「たきびをするんだよ」とE夫が手を止めて答えた。「たきびするの」と少し声を張り上げた感じで、Y夫が会話に入ってきた。「そうだよ」とE夫は答えながらも、箒を持つ手は動き始めていた。

「たきびだって」とY夫は、落ち葉の山を見つめるT夫の顔を覗きこむようにして言った。T夫は一瞬はっとした表情を見せ、そして「ねえ、Y夫くん、僕たちも入れてもらおうか」とY夫に提案した。「うん、そうだね」とY夫は声を弾ませて答えた。「ねえねえ、僕たちも入れて」とT夫は箒を手している二人に声

をかけた。「いいよ。じゃあ、箒持ってきたよ」とE夫が答えた。E夫の言葉を受けて、T夫は主に保育者が使っている箒を持ってきた。一方、Y夫は塵取りを手にし、駆け戻ってきた。

私は少しの間保育室に戻り登園してくる子どもたちと朝の挨拶を交わした。その間も、四人はせっせと落ち葉を集め続けていた。しばらくして見に行くと、落ち葉の山が先ほどよりも高くなり、広がっていた。「さっきよりも大きくなったんじゃない。すごいね」と四人に声をかけた。誇らしげに微笑むE夫とY夫。「おれたちがやったんだよなあ」とほかの三人に、確かめるように言うR夫。「うん、そうだよね」とT夫が言葉が続けた。

満足気になっている四人を前に、私は寄せておいた落ち葉の山が私のイメージとは違ったかたちで活かされたことを、嬉しく思った。同時に、子どもたちが日々の遊びを自身の体験として取り込んでいること、それ

が豊かな発想につながって行くのだと実感した。

### おいも作り

「やきいもできるんじゃない」急にT夫が言った。何処かでできたことがあるのだろうかと思いつながら聞いてみると、Y夫がすかさず「いいね、やろうよ」と応じた。Y夫の積極的な声を頼もしく感じながら、私はさつまいもをどんな素材で作ろうかと考え始めた。「おいは、どうしようか」と何気なく聞いてみた。「作ればいいよ」と当然という感じでR夫が答えた。「そうね、じゃあ何で作る」と聞き返すと、Y夫が「紙、紙で作ろうよ」と勢い良く答えた。四人のイメージは重なったようで、皆で保育室に戻りおいもを、作ることにした。

Y夫に紫色の紙を要求されたので、材料室まで取りに行った。適当な大きさに切った色紙を机に置いたとたん、T夫がそれをグシヤッと丸めた。私はもう少し

立体的な感じを表現して欲しいと思い、広告紙をくしゃくしゃに丸め、それを紫の色紙で包んだ「おいも」を作ってみせた。その様子をいつの間にか見ていたK子が「おいもだ。どうして作ってるの、Kちゃんも作りたい」と言ってきた。K子の言葉に触発されたのか、四人はそれぞれ紙を手にし、作り始めた。

「おいもづくり」はA子やH子、N実といった普段はあまりかかわり合う機会が少ないメンバーが集まり、すすんだ。ある程度の量ができたところで、T夫が持つて行こうとしたのでかごを渡した。自分で作ったおいもを、各自が落ち葉の山の中に、ガサゴソと大事そうに入れた。R夫が「もつと葉っぱを集めなきゃ」と言つて、山に向かつて走り出した。E夫もR夫の後を追つて行った。Y夫とT夫は残つて、火の加減を見るような感じで落ち葉の山を突付いている。側にはA子やK子、N実も居て、楽しそうに自分のおいもの焼き加減をみている。たきび“を囲む子どもたちは突

付く度にガサガサと音を立てる落ち葉の感触を味わいながら、おいもが焼けるのを待っていた。「たきび」の温かさを感じることができる光景がそこにあった。

### N 実ちゃんすき

H子が四角いプラスチックのかごを手に保育室から出てきた。「Hちゃんかごを持ってどこに行くの」と尋ねると、「私も葉っぱを集めてくる」と真剣な表情を見せた。「そうなの、Rくんたちはお山に行ったわよ」と伝えると、H子は少し恥ずかしそうに、「先生も一緒に行って」と私の前に立った。最近のH子はこういう申し出が多い。こういう時はなるべくきちんと応えようと思う。「いいわよ、一緒に行きましょう」と返すと、H子は「やった」と小さく跳ねた。

H子と小山に行くと、先ほど勢いよく駆けていったR夫とE夫が落ち葉集めではなく、追いかけてっこをしていた。声をかけようとしたが、その間もなく、二人

は階段の方へと向かって行った。

「どうしたのかな。E夫くんた

ち」と私と同じ思

いをH子が口にした。「どうしたのかなあ」と私も不思議な思いで答えた。二人のことを気にしながらも、落ち葉を前にはしゃぐH子と一緒に、かごいっぱい茶色い葉を集めた。

かごから葉っぱが落ちないように慎重に運ぶH子とともに、たきびのところに帰って来たそこにはN実しか居なかった。ほかのひとたちはどこへ行ったのかかと思ひ、保育室の中をみると、T夫を始め数人が新たに「おいも」を作っていた。

N実がH子に「葉っぱを取ってきたの」と尋ねている。「そうそう」と言いながら集めた葉を手で振り掛けるようにたきびの上に落としていた。H子のかごを



空にすると、私にまた一緒に来て欲しいと言った。その様子を見ていたN実は「H子ちゃん、N実が行ってあげようか」とH子に話しかけた。H子は意外な申し出に「えっ」と小さく言った。あまり、かかわる機会が無かったN実に言われて構えてしまったのか、H子は言葉が返せなくなってしまった。けれどもN実は、H子の様子に引くことなく、「かご貸して。N実が行く」と言つてH子の持つていたかごに手をかけた。

H子はN実の勢いに押され気味な表情をみせたが、「ありがとう」と少しぎこちなく答えた。N実はその言葉を聞いて嬉しそうにかごを受け取り、お山に向かってスキップしながら行つてしまった。残されたH子は私に照れくさそうに「N実ちゃんすき、優しいんだもん」と言った。その表情にはN実の申し出を嬉しく思う気持ちが表れていた。

一緒に行くというかわりではなく、「代わりに行く」と言った点が二人の関係を表していると思つた。

N実がしたことは、H子のなかに「優しさ」となつて伝わり、「すき」という気持ちを生んだのであった。短いかわりであつたが、ひとつの活動が二人の距離を縮めたことが大きいと感じた。

### やきいもやさん

結局、焼きいもを作る遊びは片付けの少し前に、T夫とY夫を中心に「やきいもやさん」に変わつていった。小さな机が運び出され、その上にトレーが乗せられ、焼きあがつたおいもがそこに並べられた。面白いことに、机の位置が徐々に変えられ、最後は机の下でたきびをし、やきいもを作るようになっていた。枯れ葉の山はそのまま残すことにして、その日の活動を終えた。

次の日も朝からT夫とY夫が中心になり、「やきいもやさん」が始まつた。「お店やさん」というイメージが強いせい、前日はまた違った動きがそれぞれ

に見られた。T夫は「お店のポスターをつくる」と言つて私に文字の部分を書いて欲しいと頼みに来た。

T夫のほか数名が一枚の画用紙を囲み、ポスターが出るまでを見守つた。私がT夫に言われたとおり「やきいもやさん おいしいよ」と書き終えるとK夫がおいも食べている人の絵を素朴な感じのタッチで描き加えてくれた。

Y夫はひたすらおいもを作り続けている。そして、できたものを運び、机に並べた。通りがかつた年少組の人が二人お店に気づき、買つてくれた。しかし、手に何本も持つのは難しい様子が見てとれた。Y夫に「袋がいるかしら」と問いかけてみた。Y夫は「そうだね、作ろうよ」と言葉を返してきた。お店のことが気にかかるY夫を残し、袋を作る為の材料を取りに、保育室に戻つた。ざら紙のような質感の茶色い紙がちようどあつたので、それをお店に持ち帰つた。Y夫やK夫、F夫たちと共に、紙を半分に分けて両端を

テープで止めただけの簡単な袋を作つた。それにおいもを入れると、本物の石焼いもやさんが包んでくれるような感じになつた。

### やきいもやさんの旗

ろう下にポスターを貼り終えて戻つてきたT夫の手には「やきいもやさん」と書かれた、旗が握られていた。いつの間に作つたのだろう。どこから見つけてきたのか、丁度良い長さの木の枝に紙を付けた旗だつた。それを持つて皆にお店のことを伝えるという、T夫が考へた宣伝方法だつた。「素敵な旗が出来たわね」と声をかけたが、T夫はそれに答える間も無く園庭の中央に向かつて走り出した。F夫がかごに包みを入れて持ち、T夫の後を追いかけた。残された人たちは、私も含め少々あつげにとられていた。Y夫とK夫は顔を見合わせて微笑んだ。きっと先ほどの光景を思つて笑い合つたのだろう。

保育室からA子が出てきた。「先生、T夫くんみたいな棒が欲しいの」と訴えてきたので一緒に適当な棒を探した。T夫のよりも長さのある棒をお部屋にあった材料の中から探しあてた。その棒の先に「やきいもやさん おいしいよ」という文字とさつま芋が五本描かれた二十センチメートル四方の厚紙を付けて、旗にした。A子は「できた」と嬉しそうに声を上げた。そしてすぐに、「私も行ってくる」と言って園庭に向かった。桜の木の近くまで走って行ったA子の姿はあつという間にお山のほうへ消えて行った。

### それから

「やきいもやさん」の遊びは数日、場を外から室内へと移して続けられた。メンバーも入れ替わった。やきいもを買うとくじ引きができるといったアイデアも生まれたりした。寄せておいた落ち葉の山が子どもたちにもたらしたいメージ。そこから始まったこの遊び

を通して、子どもたちの新たな一面や、生き生きとした表情を多くみたように思う。

四人の男の子たちが落ち葉を集める姿や、H子とN実のかかわり、Y夫とA子の走る姿を思い起こすと、私は温かい気持ちになる。「たきび」と「やきいも」の温かなイメージがそこに重なるのかもしれない。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)